

グリーン四国

No.1220
2021年
11月号

吉野川上流地区民有林直轄治山事業の 地元説明会を開催

【詳細は2頁】



■紅葉深まる次郎笈

じろうぎゅう

徳島県の最高峰である剣山の南側に並んでそびえ立つ「次郎笈」は、県内二番目、四国でも三番目の標高(1,930m)であり、剣山と共に登山者に親しまれています。

名前の由来は、昔、太郎と次郎という修験者が、笈(おいずる)と呼ばれる背負子を背負い、当時「太郎笈」と呼ばれていた剣山と分かれて登ったことが由来とも言われています。

(徳島森林管理署 丸田 泰史)

目次

- ・吉野川上流地区民有林直轄治山事業の地元説明会を開催…………… 2
- ・署長からのメッセージ…………… 3
- ・樹木採取権の公募の開始&説明会の開催…………… 4
- ・各署等のたより…………… 5
- ・鹿食免(かじきめん)としてのジビエ…………… 12



四国山の日

四国森林管理局

高知市丸ノ内1丁目3-30
TEL 088-821-2052
FAX 088-821-4834
H P <http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>
E-mail shikoku_soumu@maff.go.jp

吉野川上流地区民有林 直轄治山事業の地元説明会を開催

〈嶺北森林管理署〉

令和3年4月から新規事業として着手した「吉野川上流地区民有林直轄治山事業」の地元説明会を、6月29日に高知県長岡郡大豊町の中和刈谷多目的集会所、10月8日に徳島県三好市三好市役所分庁舎において開催しました。徳島県と高知県にまたがる事業地のため、2地区で開いたものです。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、地元出席者を各自治会長とさせていただきます。関係機関は徳島県、高知県、三好市、大豊町の方々に出席いただきました。

冒頭、小笠原嶺北森林管理署長から事業着手の経緯と「地域の方が心穏やかな日々を過ごせるよう関係機関で力を合わせ、一日も早い復旧に全力で取り組んで参りたい。事業を進めるにあたっては、地元の皆様の理解と協力が必要不可欠であり、今後ともご協力をお願いしたい」と挨拶がありました。続いて吉野川上流治山事業所の黒岩治山技術官から事業概要の説明及び質疑応答を行いました。

した。

概要説明では、治山事業の目的や四国森林管理局管内での復旧事例、取組の紹介のほか、吉野川上流地区の事業期間や規模、施工方法等を動画などを用いて説明し、事業を進めるにあたっての注意点として他の事業とも競合している区域が多く、主要道路の混雑や仮設工のための土地の使用、支障木伐採などが生じるため、地区全体でのご理解とご協力が必要不可欠であることを説明しました。



事業概要説明（三好市）



事業概要説明（大豊町）

質疑応答では、事業箇所を選定した理由や保安林の指定、崩壊箇所の具体的な復旧見込み時期、道路から見えない崩壊箇所についての質問が出され、平成30年7月豪雨により被災した箇所について国が直轄事業として行うこと、事業地は保安林となるため、その指定手続きなど、県を交えて回答しました。また、現時点での各区域毎の復旧予定時期などもお答えし、具体的な情報については、事業を進めていく中でお伝えすることとして説明会を終了しました。

説明会終了後、遠方に住む地権者も増え、世代が代わって山への興味が薄れてきており、事業への理解をいただくことが難しいと感じることが増えているとお話も聞くことができました。



質疑応答（大豊町）



質疑応答（三好市）

復旧には長期間を要することから、今後地元の方々に事業への関心と理解を得る手段として、今回のような説明会等を通じて情報を共有する必要があると感じました。

署長からのメッセージ



森林教室の定番アイテム

「小枝の鉛筆」

〈徳島森林管理署長 島田 喜代司〉

林業の現場では担い手不足のほか、人材育成が求められており、徳島森林管理署でも、とくしま林業アカデミーや那賀高校森林クリエイト科、池田高校三好校環境資源科において、森林・林業に関する講義、コンパス測量やドローン操作の実習等の協力を行っています。継続的な取組には小中学生に森林・林業に関心を持ってもらう森林教室等の森林環境教育が大切だと考えています。

私も十数年前から業務のなかで、「お山ん画」でおなじみの平田さんに描いてもらったイラストを使い森林の働きや治山事業、海岸防災林の復旧について説明してきましたが、このような場で最後にお土産として配る定番アイテムがありますので、今

回はこれを紹介したいと思います。

それは、手作りの小枝鉛筆です。作り方はいたって簡単で、小枝に鉛筆の芯を仕込み、鉛筆状に削り出すだけです。イベント等で配ると小学生はもちろん大人にもなかなか好評です。

この鉛筆の材料は広葉樹の小枝等です。樹種は特に決めはありませんが、バラエティに富むように、いろんな樹種をそろえます。

作り方ですが、採取した材料の形状を見ながら適当な長さに切ります。このとき枝の自然な形状を生かしても面白いし、実用性(?)を追求した書きやすいものでもいいです。次にカットした枝の元口側の中心に芯を入れる穴をドリルで開けます。そして開けた穴に鉛筆の芯を挿入、後は鉛筆形状に削り出すと完成です。芯は製図用のものを使いますが色は黒のほか、赤と青があるのでこれらが入っていると、「赤鉛筆もある!」と歓声が聞こえます。



木取り



ボールペン穴あけ



完成

とても簡単な工程なので1日で数百本の製作が可能です。これをイベント時にたくさん用意して持つていくと、両手に持てるだけ持つて帰る子供や気に入った1本を選ぶ子供と様々ですが、ほとんどの子供がとても喜んでくれます。

鉛筆のバリエーションとしてボールペンやシャープペンシルも製作しています。ボールペンはノック式なのでスムーズなペン先の出し入れをするために、両端のセンターを貫通させる必要がありますが、真っ直ぐ

に見えても、曲がりのある長さ10cm程度の穴あけが難しく、少々コツがいります。これが通れば後はスムーズですが、シャープペンは非常にデリケートなため、さらに精密な作業が必要となり大量生産とはいかず、ゲームやクイズを行いその成績優秀者の賞品にする等に使います。

徳島署へ来てからも、組立キットの鉛筆立てを作る森林教室が開催され、そこに立てる小枝の鉛筆を配り好評でした。

たいしたものではありませんが、子供たちが樹木や森林・林業に興味を持つきっかけになればと思います。あれば署の木工室で作業しています。



小枝ボールペン (ノック式)



小枝鉛筆

樹木採取権の公募の開始 & 説明会の開催

〈局 資源活用課〉

樹木採取権制度は、国有林の一定区域（樹木採取区）において、一定期間・安定的に樹木を採取できる新たな制度です。

四国森林管理局では、9月13日に高知県四万十町及び中土佐町の国有林のうち約291haを「四国1四万十川上流樹木採取区」として指定しました。さらに9月30日から本制度の公募を開始しました。

権利を取得すると、この樹木採取区では、一定の条件下において国有林樹木を10年の間、採取することができます。

公募開始後、樹木採取権公募要項等に関する説明会を10月13日に高知県立県民文化ホールで開催し、現地説明会を翌14日に高知県四万十町松葉川山国有林及び中土佐町下ル川山国有林で開催しました。

当日は、この樹木採取区において樹木採取権の設定を受けることを希望する事業者に対し、本制度の主旨や仕組み、申請書の作成方法等をご

理解いただくことや、樹木採取区の樹木を実際にご覧いただくことを目的として、局や林野庁（WEBで参加）の担当から説明を行いました。



1日目 公募要項等説明会の様子
（高知県立県民文化ホール）



2日目 現地説明会の様子
（高知県四万十町松葉川山国有林）

参加者は公募要項等説明会には4事業者が、現地説明会には3事業者が来られて、公募等に関する質問をいただくとともに、採取区の実際の現地において樹木採取区内の樹木の状態・地形・アクセス道等を確認していただきました。

説明会において配布しました資料、お寄せいただきました説明会当日の質問に対する回答、公募要項等に関する質問に対する回答を当局のホームページにて公開しておりますので、樹木採取権の設定を検討される際にはご参照ください。

なお、この説明会への参加の有無にかかわらず、樹木採取権設定の申請は行うことができます。

公募の締切は12月20日17時です。多くの事業者の皆様からの申請をお待ちしております。

※樹木採取権制度の詳細についてはこちらをご覧ください。



各署等のたより



「標高が変わった？」

三嶺山頂の標高看板の掛替作業を実施

〈高知中部森林管理署〉

高知県と徳島県の境、物部川源流をなす地域にある「三嶺」は三つのうねのあつまりでミウネと呼ばれますが、サンレイの愛称でも広く呼ばれています。

西日本第二の高峰剣山脈の西南に位置し、西熊山、白髪山などの連山を抱え、山頂では眼下に西熊渓谷、彼方に太平洋を望み、天気良ければ瀬戸内海も眺望できる。パノラマが楽しめる、登山愛好家からも親しまれています。

かつて三嶺山頂標高は1893mでしたが、国土地理院で測量技術の発展等に伴い、全国の三角点、日本の主な山岳の山名、最高地点の位置・標高などについて、点検、補足調査

が行われた結果、現在は1894mとなっております。

管内のシンボルとも言える三嶺の山頂の看板を、「立派な看板にしよう」と職員がケヤキ板で作り直し、10月15日に掛替作業を実施しました。



職員手作り看板

別府峡から白髪分岐くカヤハゲ経由で、高知・徳島境の稜線沿いを登り、紅葉には少し早いようでしたが、途中の高山植物や、遠くに見える三

嶺山頂、眼下の西熊渓谷、高峰剣山脈の360°パノラマを眺めながら3時間後、三嶺山頂に到着しました。この日は、10名ほどの登山者が登頂されており、その後も続々登ってこられていました。



高知側、西熊渓谷



徳島側 高峯剣山脈

看板の掛替作業を始めると登山者の方々から、「多くの山を登って、写真撮ってきたが、新旧標高を並べた記念撮影は初めて」「最高の登山記念日」との話を頂き、遠くは山口県から来られていた方もいました。



看板掛替作業

これから三嶺に登られる方々に、新しい山頂看板が記憶に残って頂けると幸いです。

なお、平成25年以降だけでも、改定された主な山岳標高は全国に100余りあります。



八面山で登山体験（二校）

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

四万十川の支流で黒尊川源流域の森林である八面山はつめんざんや吊尾根の天然林は、野生生物やシイ・カシ林からミミ・ツガ林、ブナ林への植生の移り変わりなどつぶさに観察出来る良いフィールドです。

9月30日に四万十市立西土佐小学校4年生18名、10月15日に愛媛県松野町立松野西小学校の4年生10名を対象に八面山登山体験学習を実施しました。

それぞれの学校とも当日は天候に恵まれ、鹿のコールで開会式をした後登山口（1,000m）に移動し、軽く足腰をほぐしてから出発、歩道沿いの樹木（ヒノキ、ガマズミ、カナクギノキ、タンナサワフタギ、コシアブラ、リョウブ、ウツギ、マツ、アセビ、モミ、ミズメ、ブナなど）や草花（ミヤコザサ、キオン、シモバシラ、アザミ、センブリ、ヒカゲノカズラなど）、そして、ニホンジカの食害などの学習をして約50分で八面山山頂（1,165m）に到着しました。

山頂では、遠望できる高知県と愛媛県の県境や鬼ヶ城山系、三本杭さんぼんかや高月山などの山々、小学校のある方角について地図や衛星写真で説明し

ました。また、四万十川の支流黒尊川や目黒川の源流点もこの近くにあって、源流域の森林や自然が川本来の良好な清流を育んでいることを説明しました。

その後、みんなのお待ちかねの昼食を挟んで、ブナ天然林で、「カモフラージュ（きみたち、かくれんぼするときどこにどうやってかくれる?）」という置き換えで自然の中でテープに沿って置かれた人工物を探し出すというネイチャーゲームをしました。終了後には虫のかくれんぼという本を児童に見せて擬態ぎたいについて説明しました。

そして、シカ防護柵の設置箇所へ移動して、「ニホンジカ被害の現状や対策」について説明し、シカが増えた理由などについて話し合いました。

下山途中に、大久保山（標高1,158m）経由で山頂に登り、山頂では、「みんなで大声でヤッホーと小学校の方角に向けて（愛を?）叫びました。

今年も、近年に見られない程のアサギマダラ蝶の群舞が登山の行き帰り各所で見られ、児童達は「蝶が大きくて羽が青くてきれい」「1km以上も渡りをするなんてすごすぎる」と驚いていました。

登山を体験する中で、「はじめてで疲

れた」「山って楽しい、また来たい」「自然の景色がきれいですばらしい」などの声が児童から聞こえてきました。この森林教室で、実際にブナやミズメの木肌に触れて樹皮の匂いを嗅いだり、森林の土や落ち葉に触れたり、気圧の変化を体験（松野西小はちよつど座学で気圧について学習中）する等の体感を通して、児童生徒の自然や森林への興味・関心が深まったと思います。



登山の様子（西土佐小学校）



ネイチャーゲーム（カモフラージュ）の様子（西土佐小学校）



シカ防護柵の前で説明の様子（松野西小学校）



大久保山山頂で小学校の方角に向けてみんなで愛?を叫ぶ（松野西小学校）

若手職員がコウヨウザンの植付を体験

「集約化試験団地」でOJT研修を実施

〈森林技術・支援センター〉

10月18日と21日の2日間にかけて、当センターが昨年度様々な取組を一箇所に集めることで、新たな造

林技術の確立試験の効率化を目的に管内2カ所に設定した集約化試験団地（グリーン四国No.1213p4参照）において、若手職員を対象としたコウヨウザン苗木の植付等に係るOJT研修を実施しました。コウヨウザンは、一般的な造林樹種と比較して、成長速度が速く比較的短い期間で木材等としての利用が見込まれる樹種である早生樹種の一種です。

18日は、いの町戸中にある葛籠谷黒滝山^{たきやま}231林班ろ小班において、局保全課及び治山課の職員3名が参加、21日は、高松市塩江町にある鷹山33林班へ1小班において、香川所の職員2名が参加し、当センターからは5名の職員で指導にあたりました。

18日の黒滝山試験団地では研修に先立ち、鷹野孝司所長から、植付に係る特殊な形のコンテナ容器を使用して育てた根鉢付きの苗木であるコンテナ苗の導入状況、植栽本数や補植・改植の考え方、コンテナ苗の植栽器具^{この特徴や実際の使用方法等について説明を行った後、当該試験団地内に設定している早生樹の造林技術の確立試験区で実際にコウヨウザンの苗木の植付作業を体験してもらいました。}この特徴や実際の使用方法等について説明を行った後、当該試験団地内に設定している早生樹の造林技術の確立試験区で実際にコウヨウザンの苗木の植付作業を体験してもらいました。



OJT 研修現地事前説明状況



黒滝山での植付風景

また、21日の鷹山試験団地の研修では江入力男副所長から、コンテナ苗の特徴や植え方について指導を行った後、早生樹の造林技術の確立試験区でコウヨウザンの苗木の植付

を行ってもらいました。

研修生の中には、手慣れた様子で苗木を植える職員もいれば、伐採後の造林地に初めて足を踏み入れる職員もおり、急な斜面の移動にも一苦勞しながら、1本1本丁寧に植付を行う姿が見られました。



鷹山試験地での植付風景

実際に植付を体験した研修生からは、「植穴をまっすぐ開けるのが意外と難しいことがわかった」「苗木と植付器具をどう持ち運べば効率的なのか、自分なりに考えながら作業したが、作業条件により変わってくるのかなと思った」「初めての経験で、数本植えるだけで腰が痛くなり、身をもって造林作業の大変さがわかった」「専用器具を使わなくても鋏でコ

ンテナ苗を植えることができることを初めて知った」「石が多く植穴を開ける場所を見つけないのも一苦勞で、思ったより時間がかかった」などの感想が聞かれましたが、皆、一様に普段経験することのない作業に「楽しかった」とのことでした。

また、黒滝山では集約化試験団地全体の各試験区ごとの試験内容について、所長より概要説明を行い、「どの単木保護資材が、生分解性なのか」「資材の回収はどうするのか」「ノウサギの忌避剤はどういったタイプのものか。また、その効果は？」など質問に対し、センター職員から説明を行い、疑問点を解消している様子でした。

四国局においては、再造林にコンテナ苗を使用することが一般的になってきており、そのコンテナ苗を植える植付器具についてもいくつかのタイプがありますが、植付を行う林地の傾斜や土壌により、その場所への植え付けに適した器具を選定することが作業の効率性や体力的な負担の軽減にもつながることから、実際に植付を体験することにより理解が深まったと思います。

「松野東小学校で年間を通じた森林環境教育（土にすむ生物と水の土壌浸透実験）を実施」

（四万十川森林ふれあい推進センター）

10月8日に松野町立松野東小学校4年生8名を対象に、第3回目となる森林環境教育「土にすむ生物と水の土壌浸透実験」をしました。

最初に、「土にすむ生物」の座学で土の中の生き物の役割について説明しました。

土にすむ生物の観察では、学校の畑や花壇の土を採取し、顕微鏡で覗きながら肉眼では見ることのできない土の中の生物を見つけ出してはスクリーンにその姿を映してみんなで観察しました。この講義と観察を通して、普段は肉眼で見ることのできない土にすむ生物の死骸やフン、落ち葉などの有機物を分解して再び植物が根から吸収・利用できる養分（ミネラルなどの無機養分）にしていること、更に、植物・動物・微生物の間で物質循環が絶えず森林の中、川の中、海の中で行われ生態系の食物連鎖はエンドレスで回り続けていることを説明しました。

次に、「水の土壌浸透実験」で、山

の模型を使って「木のある山」と「木のない山」を再現し、「二班に分かれてじょうろに入れた水を雨に見立てて降らせて時間の経過と共にどういう変化が出るのか実験・観察をしました。木や枯葉を通して出てくる水は薄い濁りで計量カップに溜まっていくのに対し、木も枯葉もない土がむき出しの模型からは先に濁った水が計量カップに一気に溜まる様子を目の当たりにし、家の模型が倒れて土が剥がれて緑色の底板が見える」と、児童達から「ああ土砂崩れだ」とざわめきが起こりました。変化の多い「木のない山」の模型と、変化が少なく安定している「木のある山」の模型を比較観察し、各自がワークシートへととりまとめる学習をしました。

最後に、児童から「実験結果の違いが水の計測結果で出たので森林の持つ大切さがわかりました。私は木のある山の方へ住みたいと思います」等の感想があり、森林環境教育を重ねて実施することで、身近な自然の大切さ、山・川・海のつながりについての理解と関心を深めていると感じました。

森林環境教育実施後には、今後の森林環境教育に生かす目的で、毎回教職員へのアンケート調査の協力を

お願いしています。今回のアンケートの一部を参考に添付します。当センターでは、これからも学習指導要領や教科書ともリンクした、



土の中の生物を顕微鏡で見たり、スクリーンに映し出して観察中



土にすむ生物の座学の様子



山の模型を使った水の土壌浸透実験の様子



山の模型（木のある山と木のない山）の実験準備作業の様子

児童・生徒にわかりやすい森林環境教育の実施に努めて参りたいと考えています。

おたのしみの中には、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。

2. 児童・生徒の感想
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。

3. 職員による感想
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。
 ・おたのしみは、季節ごとの楽しみがある。どしどしお楽しみを味わってほしい。と思いた。

4. 今後の取組に向けて
 (1) 児童・生徒の感想
 児童・生徒の感想を踏まえ、今後の取組を計画していく。また、児童・生徒の感想を踏まえ、今後の取組を計画していく。
 (2) その他
 その他、今後の取組を計画していく。また、児童・生徒の感想を踏まえ、今後の取組を計画していく。

ご協力ありがとうございました

森林環境教育実施後のアンケート結果・裏

森林環境教育実施後のアンケート（教職員用）

実施期間：令和3年10月8日
 実施場所：松野町立松野高等学校

今回の取組を踏まえ、今後の森林環境学習をより効果的に実施するため、先生方の貴重な意見・感想をお聞かせ下さい。

1. 今回の取組について

松野町立松野高等学校

講義内容	児童・生徒の感想		3・4年生に響いたか		講義時間について		授業（教員）の満足度		意見・感想
	満足しているか	満足していないか	満足しているか	満足していないか	満足しているか	満足していないか	満足しているか	満足していないか	
土にすむ生物と山・川・海をつなぐ（講義と観察）	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	観察を使った授業は、子ども達にわかりやすい。また、山・川・海をつなぐという視点から、生物・地理・地質・環境・社会・経済のつながりを学ぶことができた。貴重な機会であった。
水の土壌浸透実験	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	実験を使った授業で、大層おもしろかったです。児童が上手にできた。水がしみこんでいく様子を見て、楽しく実験することができた。

森林環境教育実施後のアンケート結果・表

今年度は、例年のドローン操作講習に林分調査の実習を加えた2部構成で実施することとし、まずは、幡多農業高校敷地内の森林において林分調査の実習を行いました。当署の職員から、調査の目的、調査方法や手順について説明した後、生徒による調査を行いました。調査では、樹木の直径を測る人、樹高を見る人、野帳係の各担当を交代しながら生徒全員に体験してもらいました。特に樹高測定はコツがあり、初めての体験にてこずりながらも生徒同士が話し合いながら調査に取り組んでいました。また、新しいICT技術として、林内をレーザーस्क्यानする森林三次元計測システム（OWL）を職員が紹介・実演し、生徒たちは興味深そうに見入っていました。

幡多農業高校で「ドローン操作等講習会」を開催
 〈四万十森林管理署〉

10月19日、四万十森林管理署では、昨年引き続き幡多農業高校グリーン環境科1年生18名を対象とした「ドローン操作等講習会」を開催しました。

今年度は、例年のドローン操作講習に林分調査の実習を加えた2部構成で実施することとし、まずは、幡多農業高校敷地内の森林において林分調査の実習を行いました。当署の職員から、調査の目的、調査方法や手順について説明した後、生徒による調査を行いました。調査では、樹木の直径を測る人、樹高を見る人、野帳係の各担当を交代しながら生徒全員に体験してもらいました。特に樹高測定はコツがあり、初めての体験にてこずりながらも生徒同士が話し合いながら調査に取り組んでいました。また、新しいICT技術として、林内をレーザーस्क्यानする森林三次元計測システム（OWL）を職員が紹介・実演し、生徒たちは興味深そうに見入っていました。

その後は教室において、職員が今回の調査データを集計、蓄積量や立木価格を算出し、調査した森林の価値を実感してもらいました。

ドローン講習の座学では、ドローンの仕組みと航空法に基づくルールや林業分野におけるドローンの活用事例を説明しました。その後、グラウンドに場所を移し、3班に別れてドローンの基本飛行の操作を習った後、リレー形式で約50m先のパイロンを旋回し戻ってくる操作を体験し、操作に慣れると、先程の林分調



職員による ICT 機器による説明

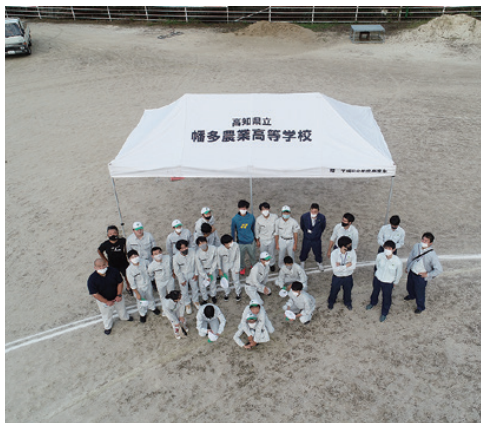
最後に、中川康弘総括森林整備官から、「今日は四万十森林管理署で取り組んでいる業務を体験してもらった。これを機会に林業という分野に興味を持っていただけたらうれしい」とのあいさつの後、恒例の上空からのドローンによる記念撮影を行



ドローン操作の様子

査を実施した箇所や隣接する学校果樹園を上空から確認しました。生徒からは「最初は慣れなかったが、感覚をつかむと簡単に飛ばせるようになってうれしかった」「実際に山でドローンを飛行させ、写真や動画を撮影する操作をしてみたい」との感想がありました。

い、講習会を終りました。



ドローン操作の様子

当署では、ドローンを林地被害調査、森林資源調査、シカ被害対策等に活用していますが、将来の地域林産業を担う生徒のみなさんにドローン等ICT技術の活用を紹介するなど、農林業の振興に取り組んでいきます。

徳島県立池田高校三好校のドローン体験学習「林業出前授業」を行いました

〈徳島森林管理署〉

令和3年10月19日、徳島県三好市にある、徳島県立池田高校三好校の2年生13人にドローンの操作につい

て出前授業を行いました。

この活動は、徳島県西部総合県民局の林業振興担当と合同で、同校の環境資源科の生徒を対象に森林環境教育の取り組みの一環として、林業関係で普及が進んでいるドローンに慣れ親しんでもらうため、3年前から、ドローンの基礎知識、基本操作の習得講座を行っています。

1時限目では、ドローン講座に先立ち、西部総合県民局林業振興担当の平川課長から開会挨拶の後、ドローンやICT技術を使つての林業の取り組み状況、利用方法について説明がありました。



西部総合県民局平川課長の挨拶

続いて、徳島森林管理署の島田喜代司署長から、就職ガイダンスを行いました。



徳島森林管理署長の就職ガイダンス

ガイダンスでは林野庁の入庁案内をもとに、当署の様々な仕事の紹介や、同校の卒業生が、四国森林管理局森林・林業研究発表会で受賞したことが四国森林管理局広報誌「グリーン四国」に掲載されている記事を配布するなど、生徒には身近に感じられる内容としています。

その後、当署祖谷川第一治山事業所員の筒井達朗から、ドローンの取り扱いや操作方法の講義を行い、生徒たちは、初めて手にするドローンを

組み立てながら、ドローンのカメラで撮影した映像にとっても興味を持っていました。



操作方法を習得中

2時限目は、運動場で3班に別れ、各自10分程度操作して、体験飛行を行いました。

初めは恐る恐る慎重に操作していましたが、テレビゲームの操作方法と似ているのか、すぐ操作に慣れ、自分たちの自撮り撮影や、普段見られない校舎の上部からの俯瞰写真、動画撮影にもチャレンジしていました。

普段見られない上空からの写真や画像動画は鮮明で美しく、生徒たちはドローンの高い性能に興味を持ち、貴重な体験となる一日でした。



生徒による上空からの校舎撮影

今後においても当署ではドローン操作等の出前授業などを行い、高校などの森林環境教育を通じて森林への理解を深める取組について支援を行ってまいります。

当センターの八面山登山道の維持管理について

（四万十川森林ふれあい推進センター）

四万十川森林ふれあい推進センターの森林体験学習の主要なフィールドは、愛媛県側の登山口から黒尊・滑床エリアの八面山（一、

165m）を經由しブナ林までの1.5kmを往復するコースで、宇和島や九州までも一望でき、石鎚山などの山々も望める大変眺望の良いコースとなっています。

体験フィールド内の、滑床山国有林二〇六七林班に小班（愛媛森林管理署管内）は、ブナ、ミズメ、カエデ類からなる約二百年の天然生林で、足摺宇和海国立公園（滑床地区）第二種特別地域に指定されています。

毎年度幾つかの学校からの要請を受けて児童生徒を八面山や吊り尾根のブナ林などに案内して森林体験学習を行ったり、吊り尾根周辺の植生をシカの食害から守るため設置しているシカ防護柵（これまでに設置した面積9.25ha、延長5,620m）の点検・補修を定期的に行っています。また、県内外から登山等で訪れる方も四季を通じて多くいることから、登山道に倒れている倒木等の処理や草刈、石拾などの補修を年間数回実施しています。

今年もこの夏・秋にかけて複数回の草刈、登山者が迷いそうな場所、特に分かれ道の草刈も実施して、歩行時の転倒や歩道の踏み外しを防止、歩きやすい登山道の維持管理に努めています。



草刈作業後の状況



8月、八面山登山道草刈作業前の様子



補修作業後の状況



八面山登山道登り口の補修作業前

かじきめん

鹿食免としてのジューク

森林総合研究所四国支所長 岡 輝樹

「今日は家に帰っても子供と遊べないな」

北関東地方のある町。仕掛けていたくりわなにニホンシカがかかり、埋設まで終わって片付けをしていたとき、この有害駆除作業に携わっていた一人の40代の男性がふとそうつぶやきました。彼はその日、わなにかかったシカに電気ショックを与え、いわゆる止め刺しをする役を担っていました。電気槍を通して伝わる、シカの断末魔の震えは、父の帰りを待っている小さな子供を抱きかかえることを躊躇わせたのです。

農林業最大の加害獣シカによる年間被害額は100億円を大きく上回ると推定されています。被害軽減のためにはシカの数を減らさねばならず、本州以南だけに限っても、年間約46万頭のシカが捕獲、駆除されています。これだけの数を捕獲してもなお農林業被害は一向に減る兆しを

見せていません。国は2015年5月に鳥獣保護法を一部改正し、わな猟免許等の取得年齢の引き下げや認定鳥獣捕獲等事業者制度の導入、指定管理鳥獣捕獲等事業の創設によって、捕獲の促進とその担い手育成を目指しています。これまで被害軽減のための捕獲、駆除作業は、多くの地域で地元猟友会に依存してきました。しかし、今や猟友会そのものが絶滅危惧種でもあり、国による規制緩和は捕獲従事者確保に奏功するでしょう。

林野庁もまたシカによる森林被害緊急対策事業等において、被害軽減のためには捕獲と防除を車の両輪として進めていく必要があるとしています。ある森林管理署では林道入口の鍵を地元猟友会と共有して、国有林内での捕獲を推進したり、また別の管理署ではフォレストが職員実務としてわな設置、捕獲作業を実施したりという取り組みが工夫される

ようになってきました。

そのような中で冒頭に紹介した男性のようにシカの命を絶つという殺生行為に対して心理的負担、ストレスを感じている方も多いでしょう。わな猟や銃猟の講習会、免許試験でも免許制度や狩猟者登録について、銃器やわなの取り扱い、1日あたり捕獲上限数については話を聞き、覚えておく必要がありますが、残念ながら動物の生存権利について学んだり、問われたりすることはほとんどありません。狩猟のプロ集団として名を馳せた秋田マタギの後裔による伝統的な狩りに同行したことがあります。彼らは狩りの前夜には山神様を詣で、捕獲した後は持ち帰り、全員で丁寧に寝かせてその皮をはぎ、毛皮を用いて山神様を奉る儀式をおこなってから肉や臓器を取り出し、資源として活用します。狩猟の締めくくりは「有効活用」でした。

シカの駆除に尽力いただいている皆さんに、前日の祈りや捕獲した動物の魂を送る儀礼を忘れないでほしい、という話ではありません。多くの方が一人ひとり気持ちの持ち方、考え方を整理し、あるいは道徳律をもって対処されていることでしょう。しかし、有効活用されなければ

自然の恵みに感謝する機会がありません。国は2017年からジビエの利用拡大を目指しています。それは被害の防止に始まり、地方の所得向上や雇用、経済の活性化、捕獲のインセンティブ向上へと確かなつながるものですが、もう一つ重要な役割があります。テーブルに並んだシカ肉料理は「いただきます」であつたり「おいしい」といった自然の恵みに対する感謝の言葉を呼び、それが捕殺に従事する人の心理的負担を少しでも和らげることにつながるのではないのでしょうか。



シカモモ肉(メス1歳)のロースト

鹿食免：諏訪大社が頒布する、鹿を食べてもよいという殺生に対する免罪符のこと。

日本 鹿食免
一社 鹿食免 著

